

優秀論文要旨

Power, Gender and Language in Edith Wharton's *The House of Mirth*

(イーディス・ウォートンの『歓楽の家』
における権力、ジェンダー、言語)

溝 口 彩 香

Edith Wharton は19世紀から20世紀にかけて活躍した Old New York の上流階級の女性作家である。Wharton はたびたび作品の中で自身の属している社交界を緻密に描いているが、その描写には回顧の念だけでなく皮肉や社会に対する批判が込められている。Old New York の社交界はオランダ系移民の子孫からなる狭くて小さな共同体であり、伝統的な慣習によって結束している。この慣習というのは社交界の人々の話し方や立ち振る舞い、行動にまで影響を及ぼし、マナーに反する行動をとればたちまち噂が広がるという、社会を統制している暗黙の規律のようなものである。当時はまだ男性中心の社会であり女性の権利は限られた時代であった。上流階級の女性はふつう働くことはなく、社交界の女性にとって「結婚」は人生を左右する重大な仕事に値するものであった。

Wharton はこの *The House of Mirth* という小説の中で、主人公の Lily Birt が社会の慣習にそぐわず転落していく姿を描いている。Lily は社交界の中でも卓越した容姿の持ち主でありこれまでに幾度となく結婚の機会があったにも拘わらず、決定的な場面になると逃げだしてしまう。それは彼女が自身の価値観を捨てきれないためであった。しかしながら、慣習によって強く結びついた

Old New York の社交界では、社会慣習にそぐわない人間は生きていくことができないという Outsider に対し寛容でない一面が批判的に描かれている。

私の論文では *The House of Mirth* において、権力 (Power) や性別 (Gender) がどのように人々の話し方 (Language) に影響を与えているのかに焦点を当てながら、言語が保守的な Old New York の社会を構築し、統制している様子を考察している。当時の社交界にはヨーロッパ文化の模倣であるお上品な伝統 (Genteel Tradition) が広がっていた。率直な話し方は無礼であるとされ、婉曲的な話し方が好まれた。結婚を望む女性にとって社会におけるイメージや評判は何よりも重要であり、たった一度でも噂が立てば真実がどうであれ弁解の余地はない。このように常に社会から監視の目を向けられている女性たちにとって言語は非常に影響力の強いものである。

このような慣習に加え、男性中心社会において対等の権力を持たない女性は男性に比べ自由に思いを語ることができない。社会の慣習に基づいて交わされる婉曲的な会話や強い影響力を持つ噂、そして女性自身の語りの声が抑圧されている環境であることを踏まえ、この小説において社会を統制している言語の役割に着目して考察をした。

本稿の論文構成は3章からなる。第一章では語りの構成について論じている。Edith Wharton は男性中心主義社会を批判的に描くため、二重の語りを構成し戦略的にプロットを組み立てている。この小説の語りは全知の語り手によって進められているが、たびたび視点人物の中に入り込み、語りの距離を使い分けることで読者を巧みに誘導している。小説の冒頭部分から最後まで、視点人物として繰り返し登場するのは Lawrence Selden という男性の登場人物である。彼は Old New York の社交界に属しているが、卓越した客観的な視点を持つ人物として描かれ、内部の人間でありながらも批判的な目で社交界を観察している。しかしながら、Selden 自身もまた無意識に社交界の保守的な価値観によって強く縛られており抜け出すことができていない。Selden はこの小説の主人公 Lily に好意を寄せているにも関わらず、慣習に縛られた保守的

で臆病な性格のために周囲の人と同様、自分の目で真実を確かめることもせず噂やイメージだけで彼女のことを判断し、誤解してしまう。このように Wharton はプロットの中で男性の登場人物に読み間違いをさせることで社会の保守的な体制を批判している。

第二章では、社会によって女性の剥奪された語りの声について論じている。男性中心の社会の中で抑圧され自身の言葉を持つことができない女性の声は小説の中でたびたび語られないままに終わっている。Lily が社交界から決定的に追放されてしまう場面では、彼女は嘘の証言によって裏切られたにも拘わらずそのことに関して一切弁解しようとしなない。Old New York の社交界においては権力を持つ人物の発言が優勢となり、信じやすい話が真実になるという。この場面ではまさに権力が女性の語りの声を剥奪している様子がうかがえる。そして結局 Lily の真実は語られないままに終わってしまう。第二章ではこの小説の中で語られていないことに焦点を当てながら女性の声について考察を進めている。

第三章では Insider である Lawrence Selden と、Outsider であるユダヤ人資本主義者 Simon Rosedale の二人の持つ力 (Power) を対比させて論じている。前者は Old New York の社交界における共同体の力 (The Communal Power) として、後者は新興勢力である資本主義の力 (The Capitalistic Power) として二つの勢力がどのように二人の言語に影響を与えているかについて検証している。社交界から転落していく Lily を二人はどちらとも助けようとするが、Selden の言葉は社交界のしきたりにとらわれているため、はっきりとした実際的な援助を差し出すことができない。何度も助けようと試みるものの彼女の助けになることができず二人はすれ違ってしまふ。一方で Outsider である Rosedale は率直な言葉を話すことができるため、彼の言葉は実行力を伴い、Lily にとって心の支えとなることができる。はじめは Rosedale に嫌悪感を抱いていた Lily も彼の率直な優しさに心を開き、最後は彼だけに真実を話すようになる。上流階級の中に入るという野心を抱いている Rosedale は Outsider

として客観的に社会を観察してきたからこそ Lily を助ける現実的な手段を申し出ることができた。これは、20世紀に入り資本主義家たち新興勢力が保守的な Old New York の社交界を徐々に揺るがし始めていることを示唆している。また、ユダヤ人に対して Wharton は偏見を持っていたにも関わらずこのような彼の人情的な一面を描いているのは、社会を異なった視点から見てほしいという Wharton の読者への批判的なメッセージである。

このように私の論文では Power, Gender と Language の相関関係からどのように言語が Old New York の社交界を構築しているのかを3章にわたり検証している。